K-622

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第11集

市内遺跡発掘調査報告書(3)

唐梅(かろめ)遺跡の調査
本郷(ほんごう)館跡の調査
三嶋(みしま)遺跡の調査
開(ひらき)遺跡の調査 他

1995年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書(3)

唐梅遺跡の調査
本郷遺跡の調査
三嶋遺跡の調査
開遺跡の調査他

平成7年3月

長井市教育委員会

序

この報告書は、今年で3年目を迎えた市内遺跡発掘調査の結果をまとめたものであります。

本市では、現在約200箇所の遺跡が登録されていますが、内容については聞き取り調査や現況から把握したもので、遺跡の詳細にわたる性格や規模などは明かではありません。そのため平成4年から開発関係機関と調整をとりながら遺跡の保護に努めてまいりました。その結果、関係機関のお骨折りにより、計画の変更や最小限度の開発にとどめていただいたり、記録保存としての緊急発掘調査を実施することができました。遺跡保護について、市民の方々のご協力とご理解を得られたことは、私どもにとりまして大きな喜びとするところであります。厚くお礼申し上げます。

このたびの調査でも貴重な調査結果が得られております。唐梅遺跡では縄文時代後期の集落跡が確認され、土器文様の特徴から当時の人々の交流の広さを窺い知ることができます。また本郷館跡では、環濠集落を保存しようと「まちなみ環境整備事業」が計画され保護対策の一環として館跡の整備計画も検討されており、文化財の保護対策としては喜ばしい限りであります。他にもそれぞれの調査で貴重な成果が得られました。また、市内遺跡調査の特徴は調査に参加された方々の数が多いことです。そのことは取りも直さず貴重な体験を通して遺跡保護に対し認識の深まりと理解の広がりを見たことになります。

地域に伝わる文化遺産を後世に伝えるためには法的な裏付けもさる事ながら、多くの人々の理解と愛情がなければ到底なし得ることではありません。これからも文化財に接したときの感動を大切にしながら保護・活用に努めてまいります。

最後になりましたが、悪天候にもかかわらずこの度の調査に参加下さった地元の方々、ならびに関係機関、関係各位に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財の保護と普及の一助になれば幸いと存じます。

平成7年3月

長井市教育委員会

教育長　奥　山　晃　二

例　　言

1．本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した平成６年度以降開発事業との調整並びに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査報告書である。

2．事業期間は平成６年５月10日から平成７年３月31日までである。

3．調査体制は次のとおりである。

調　査　員　岩崎義信（長井市教育委員会生涯教育課主査）

調査補助員　神尾昭和（長井市教育委員会生涯教育課主任）

調査参加者　飯沢宇造　飯沢一男　飯沢半兵衛　梅津昭二　梅津憲子
梅津美律子　梅津幸男　遠藤春吉　大沼恒男　川崎九兵衛
小林代次　小林二雄　小松慎一　今野久美　佐藤忠雄
色摩久之丞　須貝吉次郎　平　幸太　高梨勝雄　高梨孝作
高梨千恵子　田畝三郎　手塚保夫　寺嶋孝吉　芳賀五郎
芳賀泰典　別部嘉右衛門　山口景一　横山金逸　渡部金六

事務局長　竹田欣助（長井市教育委員会生涯教育課長）

事務局次長　沼澤久四郎（長井市教育委員会生涯教育課次長）

事務局員　岩崎義信（長井市教育委員会生涯教育課主査）

事務局員　神尾昭利（長井市教育委員会生涯教育課主任）

4．本調査にあたっては、次の方々にご指導ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

山形県教育庁文化財課、（財）山形県埋蔵文化財センター、芳致地区史談会、成田地区、勧進代地区、西根史談会、豊田地区文化振興会、歌丸地区、本郷・窪地区、長井市都市計画課・農林課・土地開発公社、長井市古代の丘資料館
小松慎一氏、佐々木嘉兵衛氏、竹田市太郎氏、高石皓一氏、高石信爾氏、芳賀五郎氏

5．挿図・付図の縮尺はスケールで示した。また、遺物の写真のスケールは５㎝を示す。

6．本書の編集・執筆は岩崎義信が担当した。拓本は尾形貞夫館長の協力を、挿図・図版の作成は今のり子の補助を得た。

目　　次

Ⅰ．調査に至るまで …… 1

1．調査の目的 …… 1
2．調査の方法 …… 1
3．調査の経過 …… 1

Ⅱ．開発事業に係る発掘調査 …… 4

1．町屋川原地区 …… 4
2．開　遺　跡 …… 5
3．本郷館跡 …… 9
4．今泉金山遺跡 …… 13

Ⅲ．遺跡台帳整備に係る発掘調査

5．唐梅遺跡 …… 15
6．唐網遺跡 …… 31
7．三嶋遺跡 …… 33
8．御林館跡 …… 35
9．戸根林館跡 …… 39

報告書抄録 …… 43

挿　図　目　次

第1図　調査箇所位置図 …… 3
第2図　町屋川原地区調査概要図 …… 4
第3図　開遺跡調査概要図 …… 5
第4図　開遺跡概要図 …… 7
第5図　本郷館跡概要図 …… 10
第6図　本郷館跡調査概要図 …… 11
第7図　今泉金山遺跡調査概要図 …… 13
第8図　唐梅遺跡概要図 …… 15

第9図　唐梅遺跡土器拓影図 …… 19
第10図　〃 …… 20
第11図　〃 …… 21
第12図　〃 …… 22
第13図　〃 …… 23
第14図　唐網遺跡概要図 …… 31
第15図　三嶋遺跡概要図 …… 33
第16図　御林館跡位置図 …… 35
第17図　〃　縄張図 …… 36・37
第18図　戸根林館跡位置図 …… 39
第19図　〃　縄張図 …… 40・41

図　版　目　次

図版1　開　遺　跡 …… 6
図版2　開　遺　跡 …… 8
図版3　本郷館跡遠景 …… 9
図版4　本　郷　館　跡 …… 12
図版5　今泉金山遺跡 …… 14
図版6　唐　梅　遺　跡 …… 16
図版7　唐梅遺跡出土遺物 …… 24
図版8　〃 …… 25
図版9　〃 …… 26
図版10　〃 …… 27
図版11　〃 …… 28
図版12　〃 …… 29
図版13　〃 …… 30
図版14　唐　網　遺　跡 …… 32
図版15　三　嶋　遺　跡 …… 34
図版16　御　林　館　跡 …… 38
図版17　戸根林館跡 …… 42

Ⅰ 調査に至るまで

1．調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ約200箇所の遺跡を把握した。しかし近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。そのため開発事業と調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的にした調査である。

また、周知の遺跡は表面踏査で確認したものがほとんどであるため、遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにするため試掘調査を行い、遺跡台帳の整備にあたった。

2．調査の方法

⑴ 現地調査

遺跡として登録されていない地域でも、事業実施区域が広範囲におよぶ場合は現地調査を実施し遺跡の有無を確認し、開発事業と遺跡保護の調整にあたった。

⑵ 試掘調査

周知の遺跡が事業実施区域に含まれる場合や、周知の遺跡周辺に開発がおよぶ場合には坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図った。

また、遺跡台帳を整備する目的から、これまで表面踏査から推定した遺跡について坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺跡内容の補筆にあたった。

⑶ 測量調査

中世の館跡など現況に遺構の形態が現れている遺跡を対象に測量調査を行い、開発事業計画と遺跡保護の調整にあたると同時に、遺跡台帳の整備の目的から測量調査を行い遺跡内容の補筆にあたった。

3．調査の経過

長井市教育委員会ではこれまで実施してきた分布調査から遺跡地図を作成した。この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画されている開発事業にさぎがけて埋蔵文化財に係るヒアリングを実施している。その結果を受けて、開発事業との調整を図るために必要に応じ上記の調査を実施した。

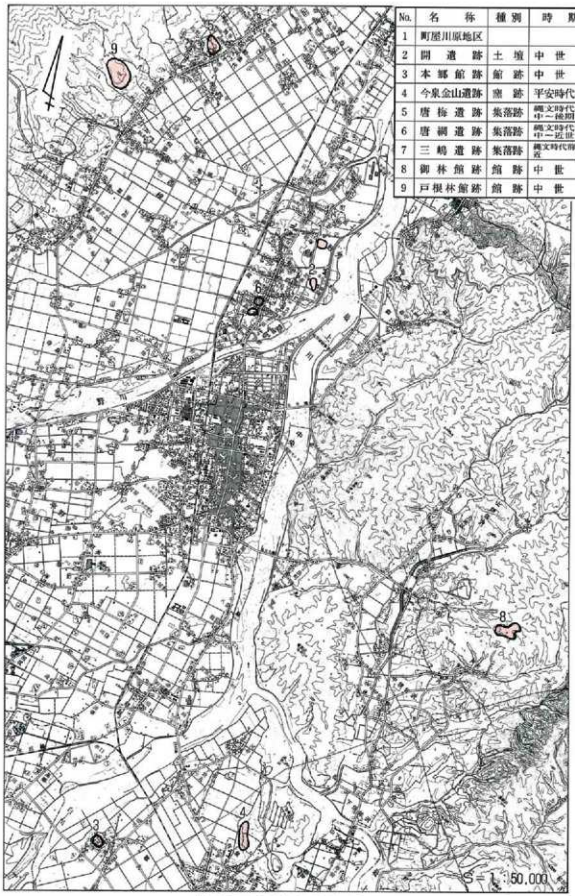
なお、ヒアリングと調査の内訳は次のとおりであり、現地調査の行程は次のとおりである。

埋蔵文化財ヒアリングおよび遺跡台帳整備に係る調査一覧表

事業種別	遺跡名	調査区分	備考
大規模造成に係わるもの	町屋川原地区	試掘調査	
	開遺跡	試掘調査 測量調査	
まちなみ整備事業に係わるもの	本郷館跡	試掘調査 測量調査	
農業集落排水事業に係わるもの	今泉金山遺跡	試掘調査	
遺跡台帳整備に係わるもの	唐梅遺跡	試掘調査	
	唐網遺跡	試掘調査	
	三嶋遺跡	試掘調査	
	戸根林館跡	表面踏査	縄張図作成
	御林館跡	表面踏査	縄張図作成

調査工程表

	平成6年								平成7年		
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
表面踏査	■										
試掘調査			■				■		■		
測量調査			■					■			
報告書作成					■	■	■	■	■	■	■



No.	名　称	種別	時　期
1	町屋川原地区		
2	開　道　跡	土　塁	中　世
3	本　郷　館　跡	館　跡	中　世
4	今泉金山遺跡	窯　跡	平安時代
5	唐　梅　遺　跡	集落跡	縄文時代中～後期
6	唐　綱　遺　跡	集落跡	縄文時代中～近世
7	三　嶋　遺　跡	集落跡	縄文時代晩期
8	御　林　館　跡	館　跡	中　世
9	戸根林館跡	館　跡	中　世

第1図　調査箇所位置図

Ⅱ．開発事業に係る発掘調査

1．町屋川原地区

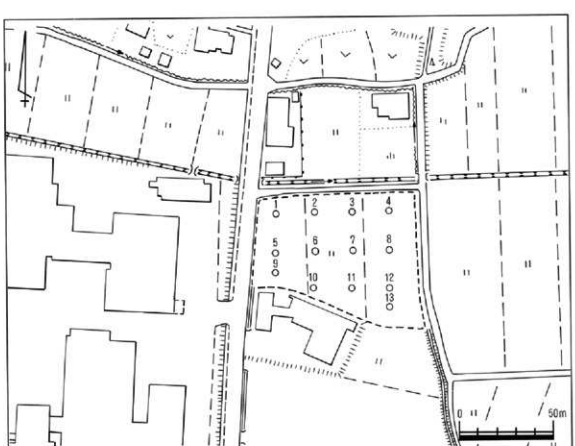
長井市街地の北に位置する成田地区は、最上川によって形成された河岸段丘上にあり、古くから商業を中心に栄えた地域である。近年、同地区の東部域は「長井北工業団地」の用地として開発が進められ、年々その姿を変えつつある。

この度、町屋川原地区に工業用地造成が計画され開発面積が広範囲におよぶこと、また当地域は河岸段丘上に位置し周辺に遺跡が点在するが、水田地帯のため分布調査が充分に行われていないことなどから試掘調査を実施した。

造成予定範囲に1×1mのテストピットを10～20m間隔に13箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

調査の結果、東西70m・南北90mの範囲にわたり試掘調査を行ったが、一部に基盤整備による土層の攪乱が見られるものの、ほとんどのテストピットでは整然とした土層の堆積が見られた。しかし、遺構や遺物は検出されなかった。

したがって遺跡保護にかかる調整は必要ないものと思われる。



第2図　町屋川原地区調査概要図

2．開遺跡

長井市街地の北に位置する成田地区は、最上川によって形成された河岸段丘上にあり、古くから商業を中心に栄えた地域である。近年同地区の西部地域は「長井北工業団地」の用地として開発が進められ、本遺跡の周辺も年々姿を変えつつある。

開遺跡は平成元年度の分布調査で発見されたもので、一辺が約15mの台形状を呈する塚で高さは１mから1.5mを測るが、塚の東側は以前土盛がおこなわれたという。現況は行蔵院の墓地となっている。現在は土地改良などで消滅してしまったが、本遺跡の南東方向に桜壇が、さらにその南東方向には毘行壇があり３つの壇は一直線上にならびそれらの延長線上をたどると葉山に達したという。葉山は古くから山岳信仰として崇められてきた山であり、本遺跡をはじめとする壇は山岳修験に関わるものと考えられる。

この度、開遺跡の北西部に工業団地造成が計画されたため、遺跡におよぼす影響を見る目的も兼ねて試掘調査を実施した。

開発予定区域に１×１mのテストピットを５～20mの間隔で29箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果・遺構は検出されなかったがＴＰ９・18から陶器片が出土した。しかし同一層からコンクリートの土台や客土が検出され攪乱も見られることから、造成予定区域には遺跡がおよんでいないことが確認された。

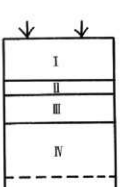
また、塚の平面図と断面図の作成にあたった（第４図参照）。

第３図　開遺跡調査概要図

調査区域近景（北から）

調査風景

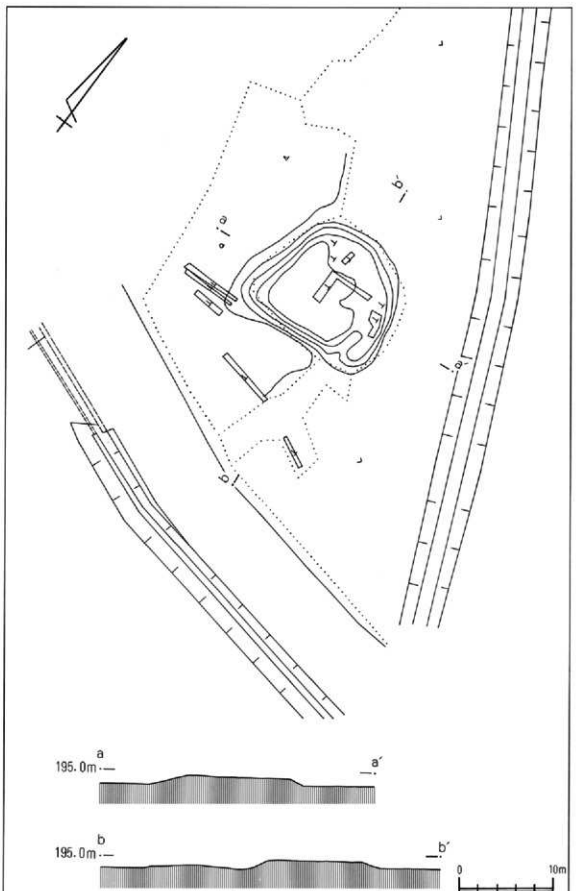
TP 28 土層断面



I 耕作土 15cm
II 暗灰茶褐色土 5cm
III 灰茶褐色土 10cm
IV 灰褐色土 20cm

TP 28 土層柱状図

図版1 開遺跡



第4図 開遺跡概要図

遺跡遠景（南東から）

遺跡近景（東西から）

図版2　開　遺　跡

3．本 郷 館 跡

長井市の南西部、白川の右岸の河岸段丘上に位置する。水田地帯のなかに集落が形成され人家の周囲には水路が巡らされ、かつての田園風景をとどめていることから、近年環濠集落として注目を集めている。なかでも若狭守が居をかまえたと伝えられる本郷館は屋敷内に樹齢数百年にもおよぶ杉の大木が生い茂り、周囲に堀が巡り環濠武家屋敷の名残を見ることができる。

この度、環濠集落をテーマにした「まちなみ環境整備事業」が計画されたのに伴い、開発事業との調整を図る目的で試堀調査を実施した。

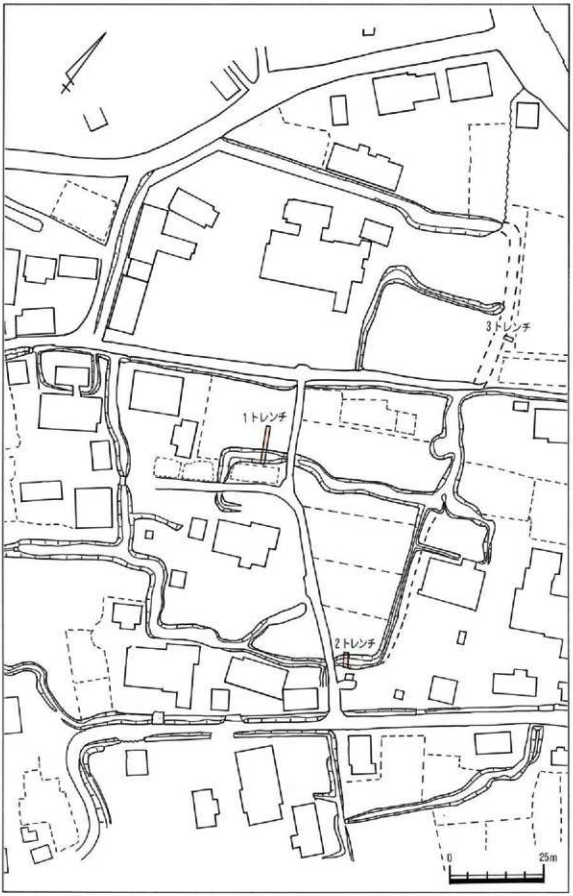
調査時期が7月で農作物の関わりから調査区域に限りがあったが、明治7年の地籍図をもとに堀跡と思われる区域に1×10m、1×4m、1×3mのトレンチを設定し地山層まで堀り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

1トレンチ付近では現況でも館堀が確認できるため堀に対し垂直にトレンチを設定し堀り下げた。堀の重複関係は認められなかったものの陶器片が出土し、土坑も確認され低部から漆器や木片が出土した。2トレンチでも堀の重複関係は認められなかったが、多数の陶器片が出土した。3トレンチは基盤整備事業のため大規模な撹乱が認められ、遺構・遺物されなかった。

限られた範囲の調査ではあったが、堀跡を試掘し重複関係が認められなかったことから本郷館は明治時代初期以降現在に至るまでそのままの姿を保ってきたものと推測される。また出土した陶器は近世・現代のものがほとんどを占めていた。

本郷館跡遠景（東から）

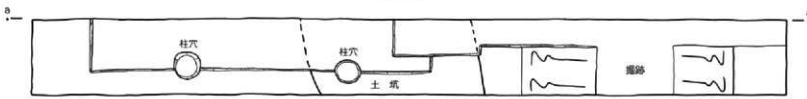
図版3　本郷館跡



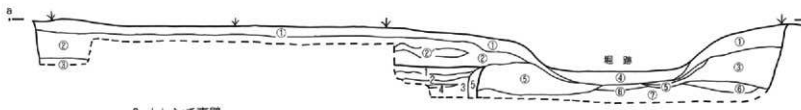
第5図　本郷館跡概要図

第6図　本郷館跡調査概要図

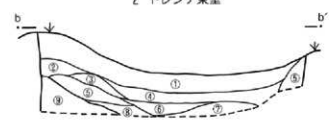
1 トレンチ



1 トレンチ東壁



2 トレンチ東壁



2 トレンチ層序

① 茶褐色表土　現代の埋土
② 暗茶褐色土　粘性を帯びるがしまりが弱い土質。
③ 灰茶褐色土　赤褐色の土質が縞状に混じりしまりがありたい土質。
④ 暗茶褐色土　やや粘性を帯びるがしまりが弱い土質。
⑤ 灰茶褐色土　粘性を帯び褐色粘土をブロック状に含みかたくしまった土質。
⑥ 暗茶褐色土　④に近似するが粘性が強くなる。
⑦ 暗茶褐色砂礫層　拳大から指頭大の礫を含みしまりがある土質。
⑧ 明灰茶褐色土　砂粒を若干含みしまりが弱い土質。
⑨ 暗茶褐色土　指頭大の礫を若干含みやや粘性を帯びるがしまりが弱い土質。

1 トレンチ層序

① 暗茶褐色表土　耕作土
② 茶褐色土　粘性を帯びかたくしまった土質。
②' 明灰茶褐色土　②層にレンズ状に堆積する。
③ 灰茶褐色土　粒子の細かい土質でしまりがありかたい。
④ 暗茶褐色土　粒子が細かくやや粘性を帯びた土質。
⑤ 灰黒褐色土　粘性がありたくしまった土質。④層以前の旧堆積。
⑥ 暗茶褐色砂礫層　指頭大の小礫を多量に含み粘性に富みしまりがありかたい土質。
⑦ 茶褐色砂礫層　拳大から指頭大の礫を多量に含みしまりがある。

土坑層序

1 灰褐色土　粘性がありしまりが強くかたい土質。
2 灰褐色土　1よりも粘性が強くかたくしまった土質。赤褐色土を縞状に含む。
3 灰褐色土　2に比べるとさらに粒子が細かい土質。
4 暗灰茶褐色土　3の土層にレンズ状に堆積する土質。基本層序の③の土質に近似するが粘性に富み遺物が出土。
5 暗灰茶褐色土　赤褐色土をブロック状に含み炭化物を多く含む。

調査風景

堀跡

1トレンチ　遺構検出状況

1トレンチ　堀跡土層断面

1トレンチ　遺物出土状況

左　同

1トレンチ　出土遺物

2トレンチ　土層断面

図版4　本郷館跡

4．今泉金山遺跡

長井市の南東部、最上川左岸一帯は小高い丘陵の地形を呈し周辺からは良質の粘土が採集され、焼物の産地にもなっている。本遺跡は丘陵の南斜面に位置し平成３年度の分布調査で確認され、ブドウ棚設置のさい多量の須恵器が出土している。また、西側400ｍの地点には加賀塚遺跡があり昭和40年代に緊急発掘調査が行われ平安時代の窯跡が確認された。

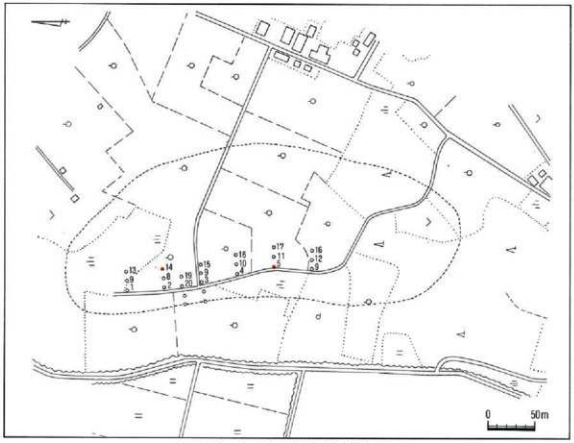
この度の調査は、遺跡の南側に農業集落排水事業雨水排水路工事が計画されたため、開発が遺跡に及ぼす影響を見るために行った調査である。

積雪期の調査であったため作業に困難をきたしたが、平成３年度の分布調査の資料をもとに調査可能な場所に１×１ｍのテストピットを10～40の間隔で24箇所設定し、地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあった。

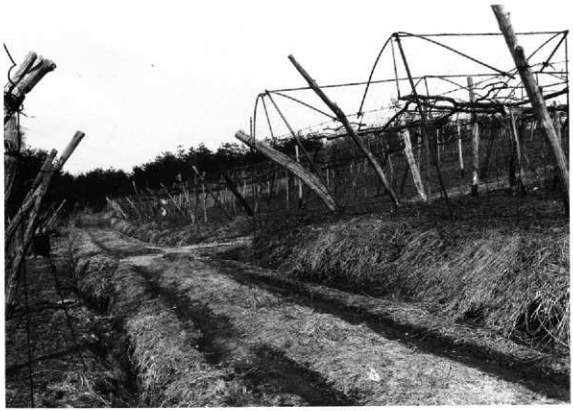
その結果、ＴＰ５、ＴＰ14から須恵器片が出土した。また、調査区北側のテストピットから焼けて硬くしまった粘質土の塊が出土した。

これらのことから、道路沿いの斜面や調査区北側から遺物が出土し分布調査の結果を裏付けるものとなった。さらにＴＰ14から出土した須恵器片には焼土が付着しており、登窯の焼台として使用された可能性がある。遺跡範囲を特定するにはさらに詳しい調査が必要であるが、出土した須恵器から平成時代末の遺跡と推測される。

以上のことから、開発工事が遺跡におよぼす影響はないものと考えられる。



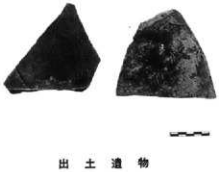
第７図　今泉金山遺跡調査概要図



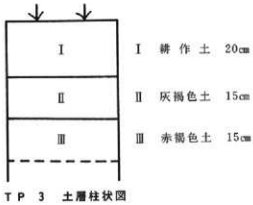
遺跡近景（南から）

遺跡遠景（西から）

TP 3 土層断面



出土遺物



TP 3 土層柱状図

図版5 今泉金山遺跡

Ⅲ．遺跡台帳整備に係わる発掘調査

5．唐梅遺跡

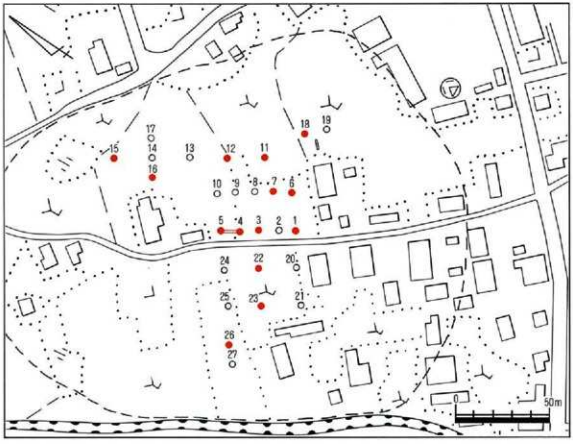
長井市の北西部、通称西山山ろくに位置する。本遺跡は昭和57年の遺跡詳細分布調査で見つかったもので当時から縄文時代の土器や石器が採集されている。

この度は遺跡台帳の整備を目的とし、将来予想される開発事業にさきがけて埋蔵文化財保護との調整に資するために行った調査である。

遺跡範囲に１×１ｍのテストピットを５～20ｍ間隔に28箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。また、遺物の多く出土したＴＰ４・５は１×10ｍのトレンチに拡張し、さらに芳賀氏宅の東側に１×５ｍのトレンチを設定し遺構の検出にあたった。

その結果、ほとんどのテストピットから遺物が出土し、遺物包含層も確認することができた。１トレンチでは集石や土坑と推測される遺構が確認され、多量の遺物が出土した。２トレンチでは住居跡と推測される遺構が確認され、多量の遺物が出土した。

以上のことから唐梅遺跡は、推定遺跡範囲すべてに試掘調査を実施しすることができず遺跡範囲の特定にはいたっていない。しかし、ほぼ全域にわたり遺物包含層が安定しており道路をはさんだ北東側に遺構や遺物を集中して確認することができ、出土遺物から縄文時代中期末から後期前葉の集落跡と考えられ、本市の縄文時代後期を解明するうえで極めて貴重な遺跡である。

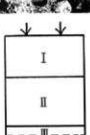


第８図　唐梅遺跡概要図

遺跡近景（西から）

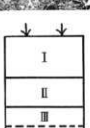
1トレンチ全景

2トレンチ全景



I 耕作土 20cm
II 茶褐色土 25cm
III 明褐色土 5cm

1トレンチ土層柱状図



I 耕作土 20cm
II 暗茶褐色土 15cm
III 明褐色土 10cm

2トレンチ土層柱状図

図版6 唐梅遺跡

遺物について

唐梅遺跡からは整理箱にして5箱の遺物が出土し、そのほとんどが1トレンチからの出土である。遺物は平面で確認したものの全体の検出には至っておらず記載した遺物はすべて包含層上位から出土したものであり、土器の分類は層位や遺構別に行ったものではない。

(1) 縄 文 土 器

第 I 群 土 器

第1類土器（第9図1～7、図版7）

隆線と沈線による渦巻や円形・楕円形の区画文が施される土器である。口縁部が内湾するものや外反する破片が見られ、区画内には単節縄文が施文されたり、刺突文が見られる。

第2類土器（第9図8～25、図版7・8）

沈線で「S」字状・「U」字状のモチーフが体部に施される土器である。口縁部や体部破片からキャリパー形の深鉢と考えられる。また、細い隆線で区画した内側に斜縄文や撚糸文を充塡した土器も見られる。粗製土器の口縁部や浅鉢の低部も出土した。

第 II 群 土 器

第1類土器（第10・11図28～69、図版8・9）

口縁部に隆帯や沈線をもつもの、体部に沈線で文様が描出されるものを本類とする。28から31は口縁部に隆帯が施される土器である。28は口縁先端がやや外反した破片で、隆帯に沈線が加えられ下端部に円形の刺突文が施される。29は隆帯で円形文を施し隆帯で繋いでいる。

32から35は口縁に沿って沈線を巡らす土器で、32・35は口唇は「く」の字形に内湾する。36・37は円形の刺突が加えられる土器、38・39は口縁部に撚糸の圧痕が見られる。

40から50は斜縄文を地文とし体部に沈線でモチーフを描出するもので、41・43は蛇行沈線が垂下する土器である。

51・52・54は半截竹管で曲線が施された土器、53は沈線間に列点が見られる。

55から63は磨消縄文をもつ土器で、55・56・63は撚糸文を地文とし他は単節縄文を地文としている。

64から69は沈線で曲線文が施される土器。いづれも単節縄文を地文とし体部に沈線で曲線による文様が描かれている。

第2類土器（第11・12図70～85、図版10）

沈線が多条化し集合沈線で文様が描出される土器である。

70・71は同一個体で、口縁部に二個一対の小波状を有しそれぞれに三個一対の円形の刺突文が見られる。口唇に沿って沈線が巡り無文帯に環状に沈線を施し口縁部文様帯を形成し、体部は単節縄文を地文とし2～3条の沈線で文様を描出している。72もやや厚手の土器ではあるが体部に同様の手法で施文している。73は口唇と頸部に沈線が施される土器。74は口縁部に立体的な装飾が付けられ沈線が多条化する土器である。75～85はさらに沈線が多条化した土器で、口唇に沿って沈線が巡るもの（75～78・80・81）、沈線間に刺突の加わる土器も見られる（75・82）。

第３類土器（第12図86～93、図版10）

器面に刺突文が多用され、沈線文や条線文が施される土器である。

86は口縁が「く」の字状に内湾し沈線が巡り、隆帯に刺突文が見られる。87・88は半截竹管状の施文具で横方向から刺突された土器、91～93は爪形文が施された土器、89は沈線に沿って刺突が施された土器、90はボタン状の小突起をもち爪形の刺突が施された土器である。93は蓋形土器である。

第４類土器（第12図94～102、図版11）

縄文を地文とし細い沈線で文様を施す土器である。

94～96・99・100・102は縄文を地文とし、２条の沈線で渦巻や曲線文を描出している。98は枕線に沿って半截竹管による刺突が施される土器である。いずれも胎土に荒い砂粒を多く含む。

第５ａ類土器（第13図103～121、図版11・12）

粗製土器の一群で器面全体に撚糸文が施される土器である。

103～105・107・109は口縁が垂直に立ち上がり、106・108は反り気味の器形である。いずれも体部には撚糸文（単軸絡条体第１種）が施される。

第５ｂ類土器（第13図122～123、図版12）

粗製土器の一群で器面全体に斜縄文が施される土器である。

124の体部文様は不明だが低部に網代痕が見られる。

以上土器の文様からおおまかな分類を試みた結果、

第１群第１類土器は縄文中期の大木９式土器に、第２類土器は縄文中期の大木10式土器に比定されよう。また、第２群第１～５類土器は縄文後期堀之内１式土器に並行する土器群と考えられる。なかでも第２群第３類土器は縄文後期の三十稲葉式土器に比定される。

⑵ 石　器（図版13）

石器はいずれも包含層から出土したもので総数65点、内訳は石匙１点・削器１点・抉入掻器１点・礫器１点・石核１点。凹石５点・石皿２点で他は剥片である。

唐梅遺跡は試掘調査にもかかわらず多量の遺物が出土し、包含層も安定しており遺構も確認することができた。本市はもとより県内でも数少ない縄文時代後期前半の遺跡として大変貴重な存在である。

（主要参考文献）

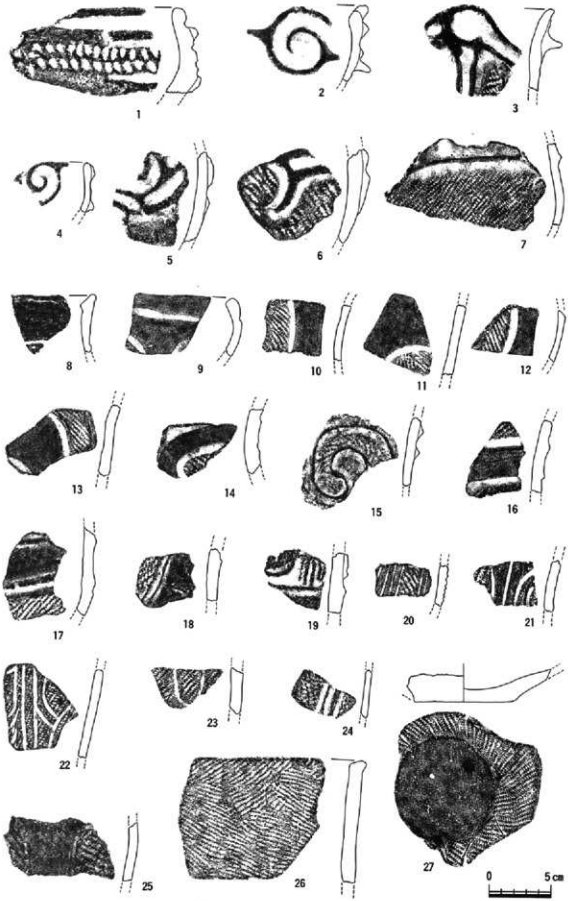
阿　部　芳　郎　1988「堀之内１式土器の構成と変遷」『信濃』　40－４

後　藤　勝　彦　1981「縄文後期の土器 東北地方」『縄文土器大成』３後期

市立市川考古博物館　1982『シンポジュウム堀之内式土器』

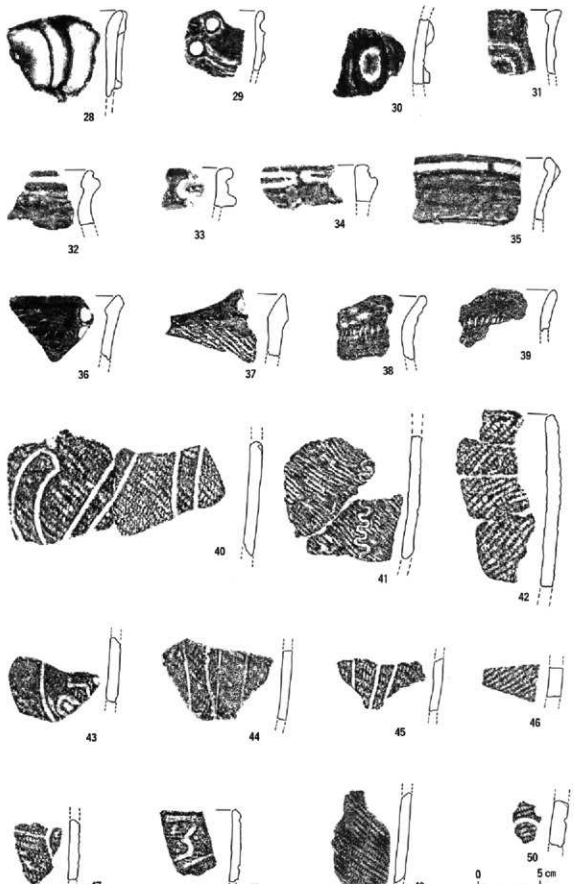
田　中　耕　作　1989「三十稲葉式土器様式」『縄文土器大観』４後期　晩期　続縄文

西　田　泰　民　1989「堀之内・加曽利Ｂ土器様式」『縄文土器大観』４後期　晩期　続縄文



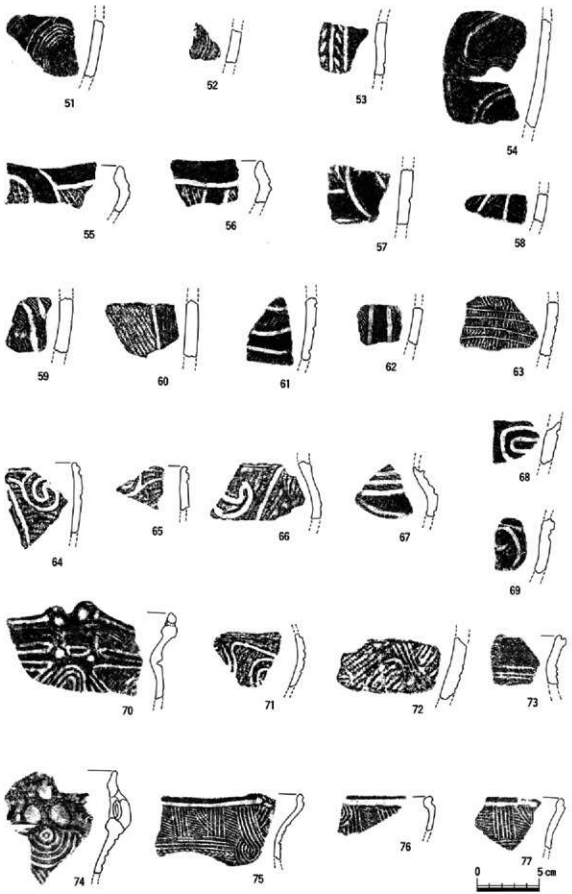
第９図　唐梅遺跡土器拓影図

１トレンチ：25
２トレンチ：１～７、９～17、20～24、26、17
ＴＰ４：19，ＴＰ18：８，18



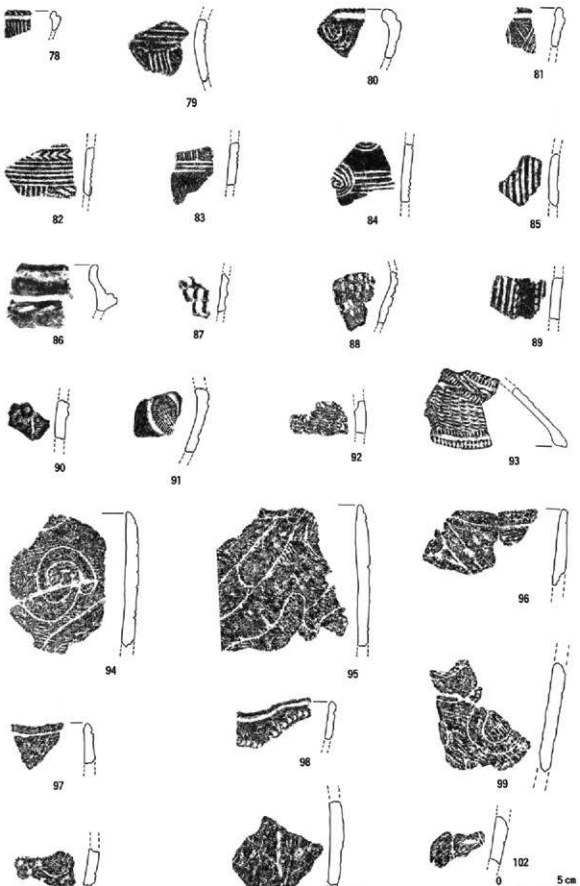
第10図　唐梅遺跡土器拓影図

1トレンチ：28.29.32～36.38～50
TP6：31, TP7：37, TP23：30



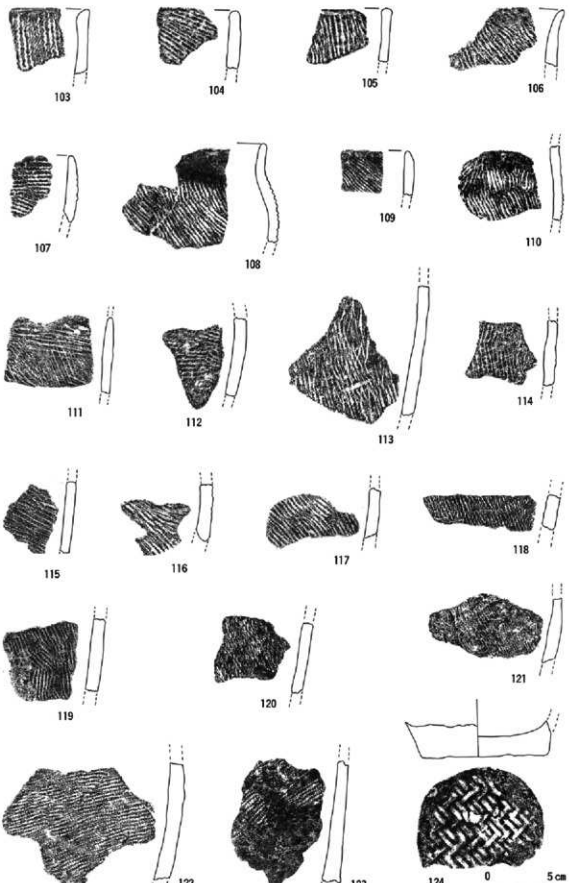
第11図　唐梅遺跡土器拓影図

1トレンチ：51.52.54~58.61.62.64~77
TP11：53，TP6：59，TP7：60，TP4：63



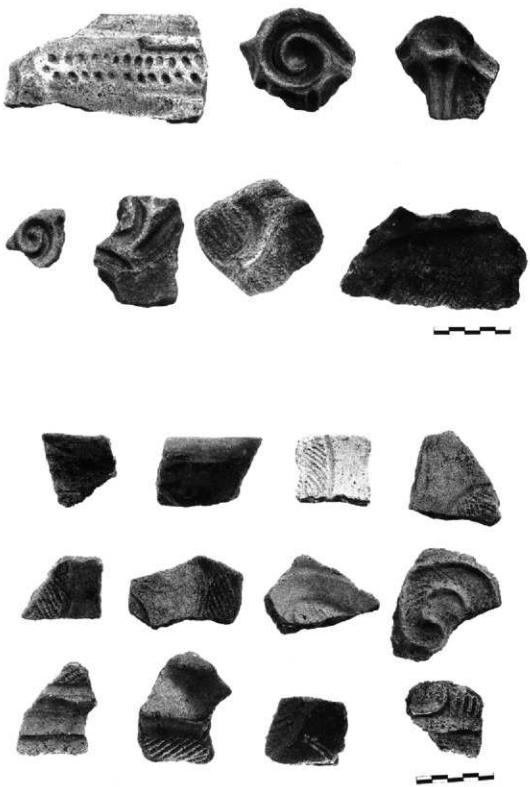
第12図　唐梅遺跡土器拓影図

1トレンチ：78～102

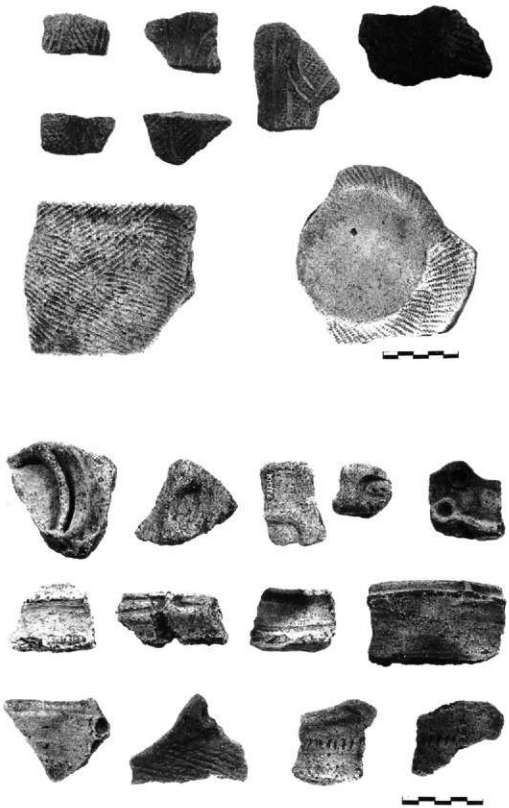


第13図　唐梅遺跡土器拓影図

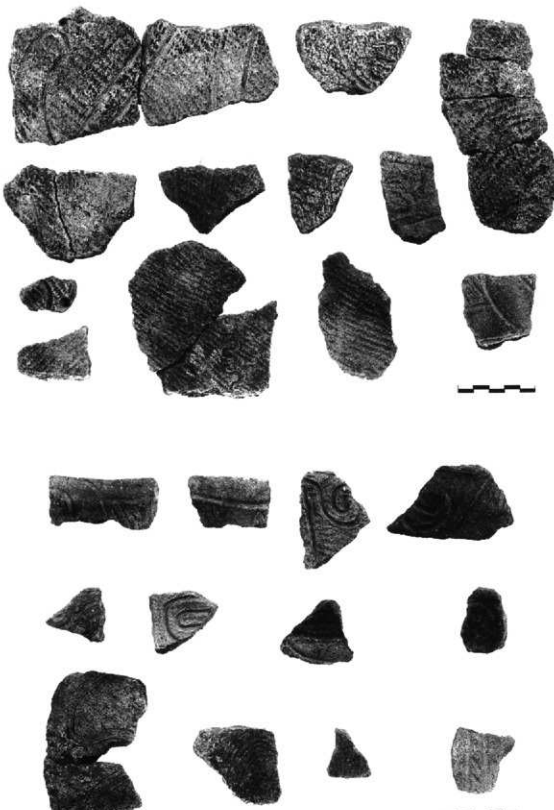
1トレンチ：103~124



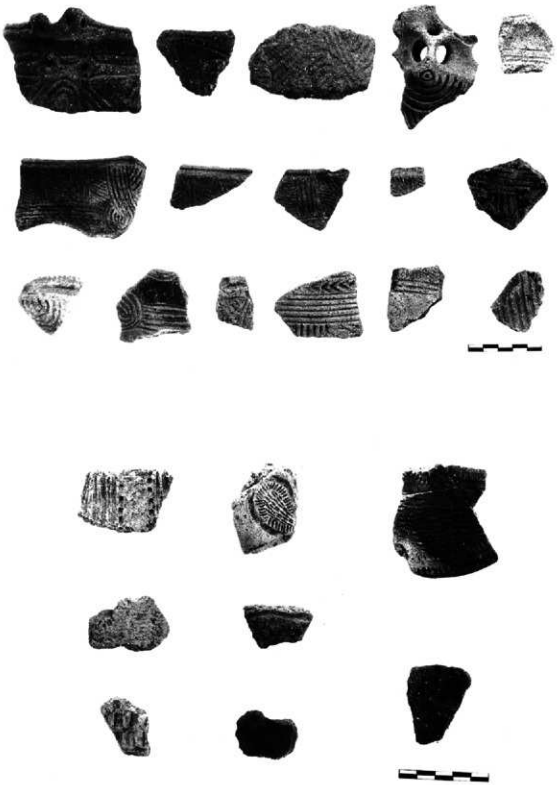
図版7　唐梅遺跡出土遺物



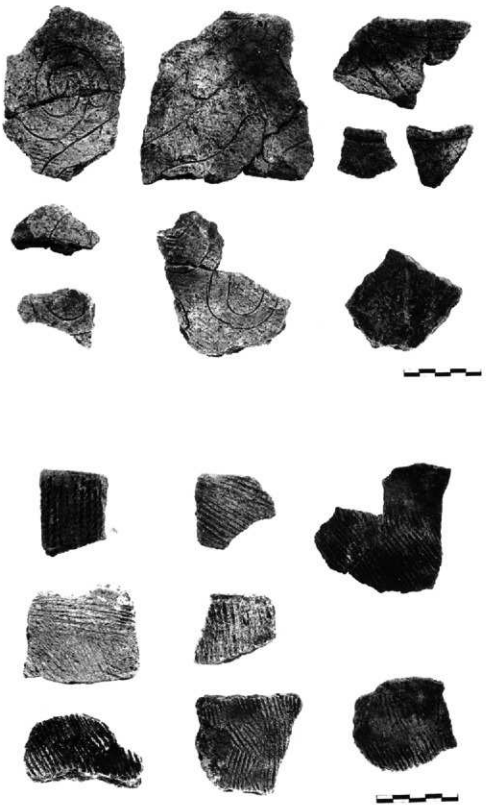
図版 8　唐梅遺跡出土遺物



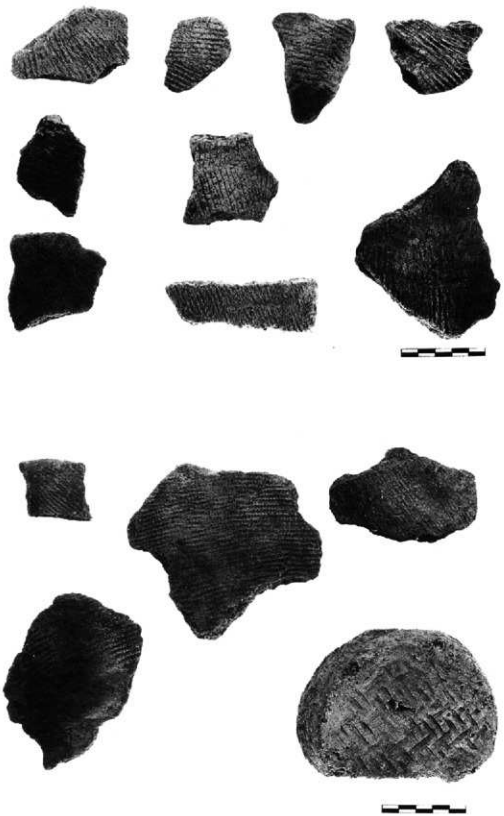
図版 9　唐梅遺跡出土遺物



図版10　唐梅遺跡出土遺物

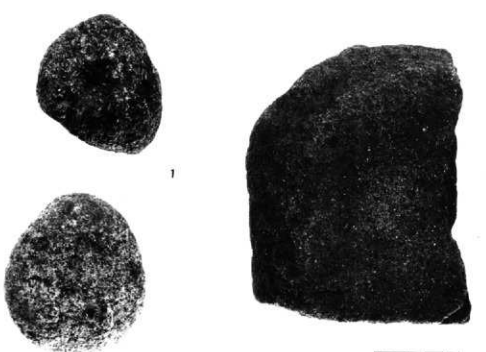


図版11　唐梅遺跡出土遺物



図版12　唐梅遺跡出土遺物

1.石匙(2トレンチ) 2.抉入扶器(TP23) 3.扶器(1トレンチ) 4.磨器(TP18) 5.石核(1トレンチ)



1.凹石(1トレンチ) 2.凹石(TP18) 3.石皿(TP18)

図版13 唐梅遺跡出土遺物

6．唐網遺跡

長井市街地の北部、成田地区に位置する遺跡である。一帯は最上川と野川によって形成された河岸段丘上にあり、成田地区で最も標高が高い地域で海抜200ｍを測る。まちの中央部を国道287線が南北に通り抜け、旧家が立ち並び古くから商業を中心に栄えた地域でもある。

本遺跡は平成元年の遺跡詳細分布調査で見つかったもので、縄文時代の遺物が採集された。しかし、遺跡の範囲や内容については聞き取り調査によるものであったため、この度は遺跡台帳の整備を目的とし、将来予想される開発事業にさきがけて埋蔵文化財保護との調整に資するために行った調査である。

遺跡範囲に１×１ｍのテストピットを５～20ｍ間隔に26箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

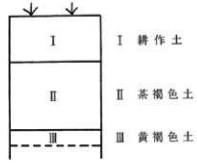
その結果、宅地南側の畑はこれまで多くの遺物が採集されてきたが、試掘を行ったところ各所に攪乱が見られた。また、宅地西側の水田一帯は地山層までが浅く遺構・遺物は検出されなかった。しかし、ＴＰ13で鉱滓がＴＰ14で陶器が出土した。

以上のことから、東側は耕作による攪乱が見られたものの、表面採集された遺物には玉随質の装飾品や剥片が含まれている。さらに、ＴＰ13から鉱滓が出土しており製鉄に係わる遺跡の存在が考えられる。調査期間が積雪期であったこと、農作物の保護から調査区域には制限があったが、周辺には中世に関する遺跡や古文書が伝わっており、遺跡の東側を中心に現在宅地になっている地域には縄文時代・中世から近世にかけての遺跡が存在するものと考えられる。

第14図　唐網遺跡概要図

遺跡近景（南西から）

TP 13 土層断面



TP 13 土層柱状図

採収遺物

出土遺物

図版14 唐梅遺跡

7．三　嶋　遺　跡

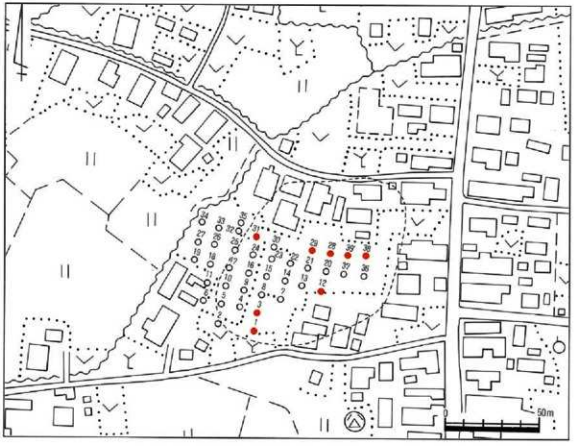
長井市の北部、成田地区に位置する遺跡である。前ページの唐網遺跡の南西側に位置し成田地区でも最も標高が高い地域で海抜200ｍを測る。

本遺跡は平成元年の遺跡詳細分布調査で見つかったもので、縄文時代の石器が採集されていた。しかし、遺跡の範囲や内容については聞き取り調査によるものであったため、この度遺跡台帳の整備を目的とし、将来予想される開発事業にさきがけて埋蔵文化財の保護と調整に資するために行った調査である。

遺跡範囲に１×１ｍのテストピットを10～20ｍの間隔に39箇所設定し、果樹や農作物を避けながら調査可能な地点26箇所を地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、積雪や農作物の関係から限られた範囲の調査であったがＴＰ１・３・38・39から遺構が、またＴＰ12・28・29・31から陶器片、縄文土器片や石器が検出された。特にＴＰ28・39からはⅢ層暗茶褐色土を掘り込んだピットが確認された。

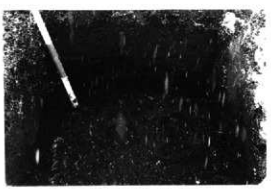
以上のことから、遺跡の東側を中心に遺構・遺物が検出され、縄文時代の包含層であるⅡ～Ⅲ層が良好な状態で存在していることが確認された。出土した縄文土器はいずれも胎土に繊維を含み斜縄文・羽状縄文・ループ文が施されており、縄文時代前期初頭の所産と考えられる。陶器類は染付文等が見られ近世の所産と考えられる。したがって遺構・遺物の検出状況や包含層の分布状況から、本遺跡の範囲はＴＰ31とＴＰ11を結んだ線の東側に良好な状態で存在するものと考えられる。



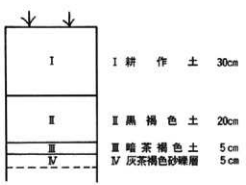
第15図　三嶋遺跡概要図

遺跡遠景（南から）

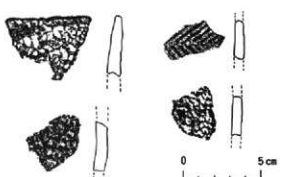
左　同（西から）



TP23 土層断面



土層断面



土器拓影図

出土土器

出土石器

出土陶器

図版15 三嶋遺跡

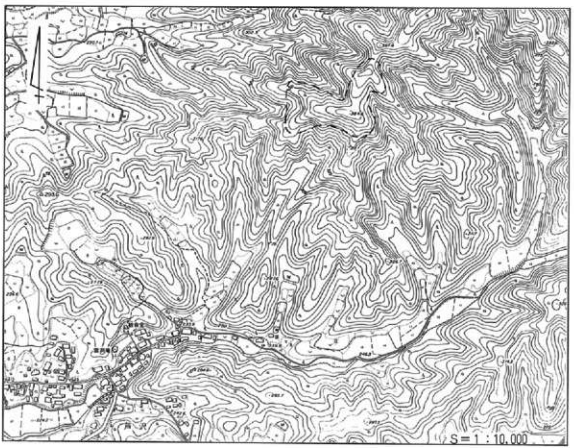
8．御林館跡

長井市の南東部、上伊佐沢地内に位置する。出羽丘陵の南端部にあたる伊佐沢地区は三方を丘陵に囲まれ南側に開けた地域である。樹齢千年をこえると伝えられる国指定天然記念物「伊佐沢の久保ザクラ」をはじめ、古くからの言伝えが残っている地域でもある。また、昭和62から63年にかけて遺跡詳細分布調査が実施され、50箇所の遺跡が確認された。

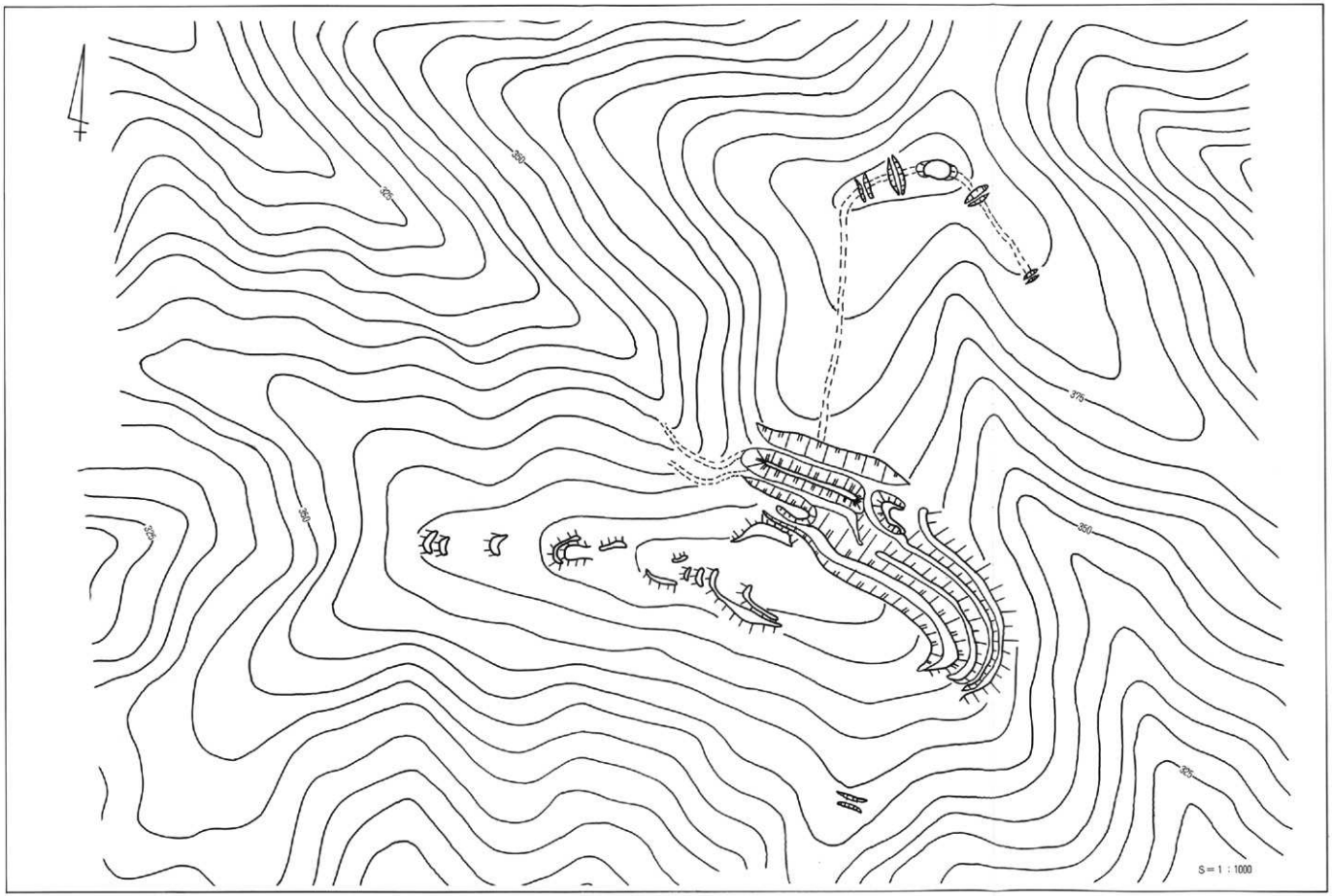
この度遺跡台帳の整備を目的とし、将来予想される開発事業にさきがけて埋蔵文化財の保護と調整に資するために行った調査である。遺跡は山林に覆われており試掘調査に困難をきたすため、縄張図を作成し概要を示した（第17図）。

山頂付近は緩やかな傾斜地となり標高約380mを測り、東・西方向に入り組む沢で二分される形状となる。東西にのびる尾根にはさまざまな遺構が見られる。明確な形状はとどめていないが尾根西側には小規模なテラスと帯曲輪が交互に築かれている。東南端には尾根を囲み込むように長さ60～70m、幅2～5mの帯曲輪が4条築かれ、3mの比高差を測る箇所もあり西側の尾根と比較すると遺存状況はきわめて良好である。北東部にのびる尾根には長さ30m幅7～10mの堀切が2箇所に築かれ比高差3mに達し、東南部の帯曲輪に連接する。本館跡で最も大規模な遺構が残っているところである。北東部の尾根の頂は平坦な地形となり道形が残り、小規模な堀切が見られる。

御林館は遺跡に関する文献資料は現在のところ伝わっていないが、東西170m南北170mに達する大規模な山館である。



第16図　御林館跡位置図



第17図 御 林 館 跡 縄 張 図

遺跡近景（南東から）

堀切遺構

図版16 御林館跡

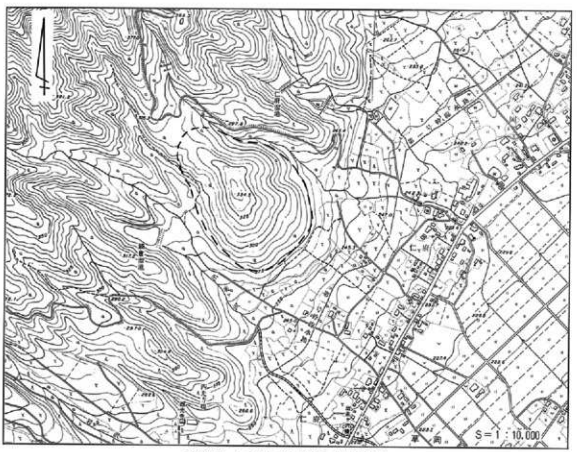
9．戸根林館跡

朝日山系の麓、通称「西山」の戸根林山頂に築かれた館跡で、昭和57年の遺跡詳細分布調査で見つかった遺跡で標高335.4mを測る。山麓は東側に開け本遺跡の北と南側は沢が形成され、ちょうど突出した丘陵となり、北東から南西方向にかけて眺望が利く。戸根林館に関する文献は現在のところ伝わっていないが、地元には古くからその存在が知られ空堀のようすなどが伝えられていた。

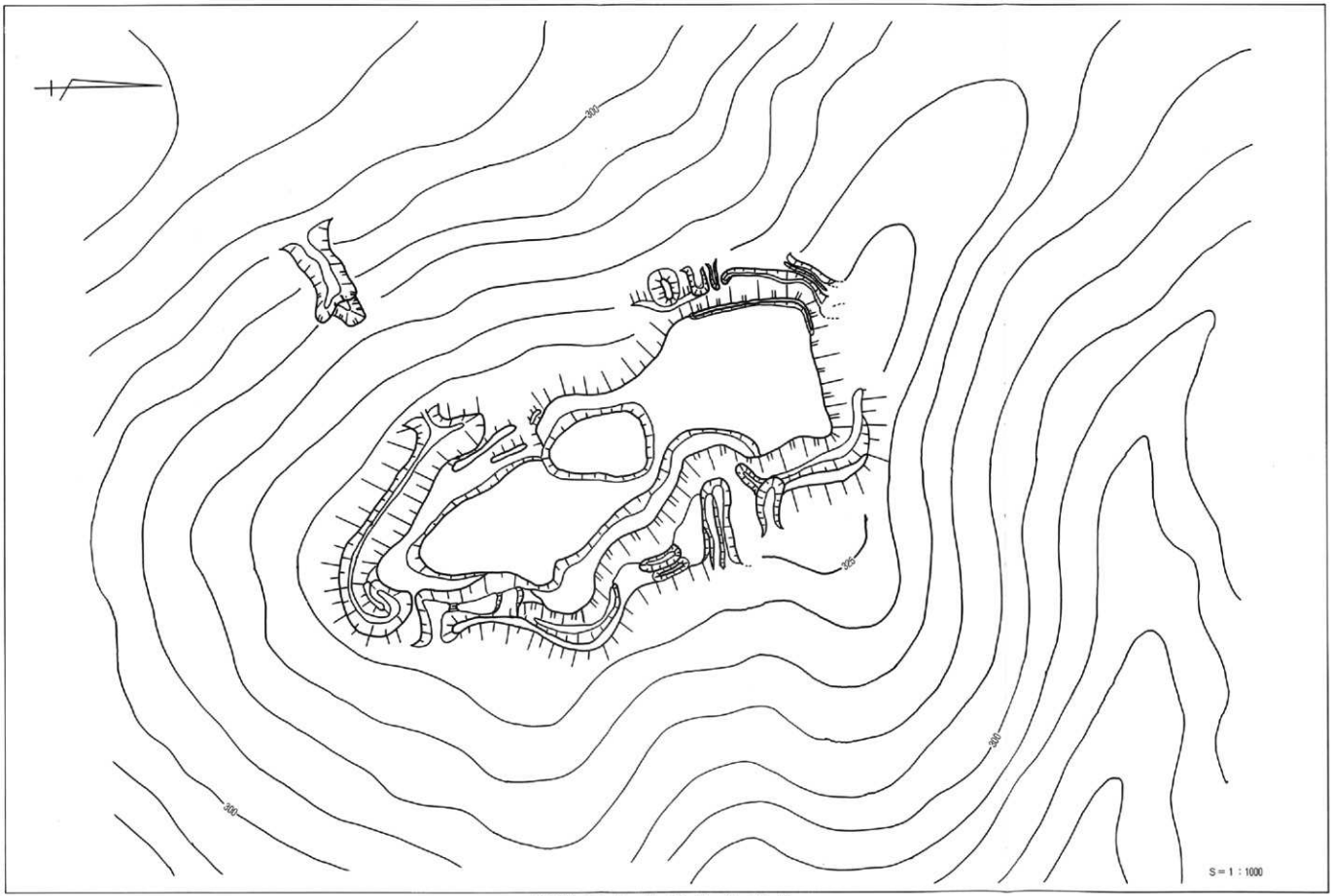
この度遺跡台帳の整備を目的とし、将来の開発事業にさきがけて埋蔵文化財の保護と調整に資するため実施した調査である。また、本遺跡は山林に覆われて試掘調査に困難をきたすため縄張図を作成し概要を示した（第18図）。

本遺跡はほぼ北西から南東方向に長軸をもち長軸約170m、短軸約90mを測り、中央部に比高差約0.5mのテラスを形成し、そこを中心に北と南に緩く傾斜し二段構築の形状を呈する。山頂部は比較的緩やかな斜面となるため、深く険しい空堀が築かれるのが特徴である。特に北から東側にかけて見られる空堀は比高差4～5mに達し、堀底には長さ12m幅4mの畝状たて堀や、25m×5mのたて堀が築かれている。曲輪の北西隅には小規模ながら長さ33m、幅2m、高さ0.5mの土塁が築かれ、斜面下の空堀との比高差は3mを測る。その空堀南端部には小規模な土塁1基とたて堀2条が見られる。また、北西にのびる尾根には長さ14m幅3mの堀切がある。遺跡南端には土塁と空堀が「の」字形に入組む箇所があり、虎口と推測される。

以上のように戸根林館は曲輪を空堀と帯曲輪で囲んだ大規模な山館である。



第18図　戸根林館跡位置図



第19図 戸 根 林 館 跡 縄 張 図

遺跡遠景（東から）

帯曲輪跡

図版17　戸根林館跡

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	市内遺跡発掘調査報告書
副書名	唐梅遺跡の調査、本郷館跡の調査、三嶋遺跡の調査、開遺跡の調査 他
巻次	
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 11 集
編著者名	岩崎義信
編集機関	長井市教育委員会
所在地	〒993 山形県長井市ままの上5番1号 TEL 0238−84−2111
発行年月日	西暦 1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号 (長井市番号)	北緯 °′″	東経 °′″	調査機関	調査 面積	調査原因
唐梅 からめ	山形県長井市 やまがたけんながいし 勧進代字唐梅・飯沢 かんじんだいあざからめ・いいざわ	6209	64	38度 09分 05秒	140度 01分 35秒	1994.11.02 〜 1994.11.04	40㎡	遺跡台帳整備に伴う試掘調査
本郷館 ほんごうたて	山形県長井市 やまがたけんながいし 歌丸字本郷 うたまるあざほんごう	6209	127	38度 3分 19秒	140度 2分 02秒	1994.07.04 〜 1994.07.08	17㎡	まちなみ整備事業に係わる試掘調査
三嶋 みしま	山形県長井市 やまがたけんながいし 成田字三嶋 なりたあざみしま	6209	42	38度 07分 17秒	140度 2分 22秒	1995.01.11 〜 1995.01.11	39㎡	遺跡台帳整備に伴う試掘調査
開 ひらき	山形県長井市 やまがたけんながいし 成田字開 なりたあざひらき	6209	39	38度 07分 32秒	140度 2分 54秒	1994.11.08 1994.12.16 〜 1994.12.22	29㎡	大規模造成に係わる試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
唐梅	集落跡	縄文中・後期		縄文土器、石匙 凹石、石皿	
本郷館	館跡	中世	堀跡、土坑	漆器、陶器	
三嶋	集落跡	縄文前期		縄文土器、磨石	
開	祭祀	中世	土壇		

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書 第11集
市内遺跡発掘調査報告書(3)

平成7年3月31日　発行

発行　長井市教育委員会
山形県長井市まの上5番1号
TEL（0238）84－2111

印刷　印刷の芳文社
山形県長井市十日町一丁目9番2-1号
TEL（0238）84－2148